

ワシントンホテルプラザ

— 訥弁はむしろ相手を能弁にする —

話は悪いところから始めて、良いところに移して終る

ワシントンホテルとのつながりは、何らかの折に既存ワシントンホテルの設備システムの不具合の解決で、奥井さんがPESに相談に訪れたことから始まる。奥井さんは三重県の松坂に住んで、街の発明家と呼ばれるような、創意、工夫の夢を語る人でその、汚れない無邪気な人柄に惹かれて会話が和むひと時を過ごしていた。奥井さんが病に冒され三重大学病院に入院治療中に見舞いに訪れた時も、病気であることを忘れてワシントンホテルの将来を思い描いて、夢の工夫を語って聞かせていただいた。不幸にも、病は癒えず、この世を去られて、その後、ワシントンホテルの掛川毅雄さんを通じて正式にコンサルティングの業務を受託することになる。

最初の仕事は1982年の高知ワシントンホテルの設備の問題点を指摘する業務であった。同時に委託いただいたのは、既存ワシントンホテルの設備の機能診断であった。その後、最初の本格的業務として、1984年新築、鹿児島ワシントンホテルの建設では、ホテル側のコンサルタントとして、東京でのオーナーとの会議に、後に社長になる野澤商策さんと同席する栄誉が与えられた。それを始まりに、その後の全てのワシントンホテルの新設では設備設計について自由な意見を述べる役目の、特別な立場を許された。新設のホテル建設では、信頼の基に、既設ホテルの設備診断から省エネルギー、設備保全、保守合理化など、設備関連のコンサルティング業務を受託して、少しく利益への貢献に寄与できたと自負している。地球環境の保全を実践するトップ企業となるために、役員と主要スタッフでの会議に講師として呼ばれ、地球環境問題の講義が出来たことで、ワシントンホテルのその後の環境保護への実践活動に繋がっていった。これはワシントンホテルの環境活動におけるリーダーとしての、社会的な評価になっていった。

特筆すべきは、野澤社長のもとで、ワシントンホテル建設テクニカルスタンダードを、4部の項目で作成したことである。(Iベーシック、IIテクニカルスタンダード、III標準例集、IVオペレーションスタンダード)

これは、Hilton Hotel、Sheraton Hotel のスタンダードを作成していたVal Lehr氏の助言を得て完成出来たものである。Lehrさんは名古屋ヒルトンの建設時に、設計者として検査に訪れていたが、それ以来、PES インターナナルの仕事で、ニューヨークを根拠に業務を共にする関係になった。又、記憶に残るのは、Lehr氏を通して紹介された、ヒルトンインターナショナルのCharles Bell 副社長が、東京訪問の折、野澤社長を紹介する機会を作り、両者のビジネスの可能性の会談に同席できたことでもある。チャーリーベルさんは、世界のヒルトンインターナショナルのホテルの最高責任者であって、自宅は、ニューヨークのワシントンスクエアに面した高級住宅で、映画「女相続人」の画面で見るとのものであった。そこへ招待されて、ワシントンホテルの若い人二人と恐る恐る出かけて、食事のもてなしまでを受けたことは、幸運のめぐみであった。



掛川毅雄氏



昔のワシントンスクエア (女相続人より)